
異世界少女とマイペース男

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界少女とマイペース男

【Nコード】

N6231R

【作者名】

そら

【あらすじ】

マイペースな高校生 あおはなひしじ 青葉聖は

いつもと変わらない平穏な日々を送っていた。
しかしある日……

「キミは選ばれたんだよ！」

「……はい？」

突然現れた異世界からやってきた少女エリアル

彼女が現れたことにより聖の平穏は崩れていく!?

作者的には学園物にしたいなーと思っています。

恋愛要素も入れたいな！。

第1話 前兆（前書き）

リニューアル版です。よかったら読んでみてください

第1話 前兆

チュンチュン、チュンチュン・・・

「んーもう朝か・・・」

今日も鳥の鳴き声で目をさます。

いつもと変わらない朝。俺、あおはびじり青葉聖は寝ぼけながらも
ベッドから出て朝食を食べに一階へと降りる。

「おはよー」

母さんに適当に挨拶をして、朝食に手をつける。

「朝からだらしないわねー。もっとシャキッとしなさい!」

後ろからなにやら聞こえてきたが気にしない気にしない。

俺はいわゆるマイペースというやつで今まで周りを特に気にせずに
生きてきた。

だからなのかいつのまにか恋人いない歴〃年齢になっていた。まあ
全く気にしてないが。

というか何でこんな話をしてるんだ?しかも誰に向かって?

.....

考えるだけ無駄だと判断した俺は後ろから聞こえてくる
母さんの小言を聞き流しつつ朝食を食べることにした。

+++++

朝食も食べ終わり、学校の支度を手早く済ませ、俺は家を出る。

「行ってきまーす」

「行ってらっしやーい!」

いつもの様に母さんの声を背中に受けながら学校に向かう。

「お!聖おはよーさん!」

「ん?ああ翔か、おはよう」

さつき挨拶してきたやつはあまみかける天見翔。俺の唯一の友達と呼べる奴だ。翔は俺とは違って明るい性格をしているからクラスでも人気がある。まあ俺とは全くタイプの違う人間なわけだが何故かこうして友達になっている。

・・・ただ一つ欠点があつてこいつは重度のロリコンだ。

ロリを前にするとどこだろうと誰の前であろうと性格がガラリと変わる。

だからこいつも今まで彼女が出来たことがない。

だが本人曰く

「誰かとデートなんかする暇があつたらロリっ娘と一日中遊んだ方がマシだ!!!」

とのことである。

そんな翔と雑談をしながら俺達は学校へ足を進めた。

+++++

学校についた俺は翔と別れ自分の机に倒れ込んでいた。

まったくあの坂道を毎朝毎朝上るのは本当に疲れる・・・

俺達の学校木内高校、通称木高は随分山の上にある

おかげで毎朝辛い思いをしながら学校に通っている

そついう訳で俺がグロッキーな状態になっていると・・・

「聖くん。お、おはよう・・・」

隣から控えめな挨拶が聞こえてくる

「んーおはようー」

とりあえず顔だけ起こして挨拶を返す

こいつは森宮咲昔せいのみやゆきから家族ぐるみで付き合いがある

まあいわゆる幼なじみってやつだ

「何か具合悪そうだけど大丈夫・・・？」

咲が心配してくれている

こいつはかなりの心配症だからな

ここで大丈夫じゃないなんて言ったらどうなることか

とりあえずこれ以上心配させないようにしないと

「大丈夫だよ」

と、至って普通の返答をした俺に咲は

「そっか、ならよかった！」

そういつて満面の笑みを俺に向けてきた

ちなみに咲はあまり女子に興味の俺から見てもわかるぐらい可愛い整った顔立ち、小柄な体型、少し幼げな声、控えめな喋り方

これらの条件のおかげで咲はクラスだけでなく学年で不動の人気を誇る

7

聞いた話によるとファンクラブまであるらしい

しかもトップはあの翔だとか

まあ確かに咲は口リに見えなくもないが

とそんなことを考えていると教室の戸が開かれた

「チャイム鳴ったぞ。席につけ」

そういつて教室に入ってきたのは俺達の担任だ

「青葉」

はいと出席を取っている先生に適当に返事をし

後は先生の話聞き流しながら窓の外をぼーっと見つめていると

(ねえねえ！)

・・・！？

なんだ今のは！？頭に直接流れ込んでくるような声
いやもしかしたら咲が話しかけてきただけかもしれない
そう思った俺は隣の席の咲に聞いてみる

「なあ、さっき俺に話しかけたか？」

「へっ？・・・ううん話しかけてないよ？どうしたの？」

なんのこと？といった感じの咲

「いや、ならいいんだ。」

咲じゃない？じゃあさっきの声は一体・・・？
しばらく考えたが何も解らなかった結果、真面目に授業を受けるこ
とにした

あのとき、あの声を聴かなければ俺はまだ平穏な日々を送れていた
んだろうか？

第2話 屋上での出会い（前書き）

2話です

どうか楽しんでいってください

第2話 屋上での出会い

授業も終わり、帰る支度をしていると

「聖。一緒に帰ろうぜ。」

と翔からのお誘いがきた。

しかし、朝のことが気になって仕方がない俺は

「あー悪い。俺ちよつといつものところ寄っていく。」

「そつか。了解。たまには俺にも相談しろよ！」

ああと翔に返事をして見送る。

なんで翔が「俺にも相談しろよ」なんて言ったかっというとなんて俺は何か考え事があるときはいつも屋上にいって一人で考えている。という訳でいつものように考え事をするために屋上に向かった。

屋上に続くドアの前に来た俺はいつものようにポケットからドアを開けるための道具を取り出す
まあこれは世間でいうピッキングという行為なんだが
まあ害があるわけじゃないから大丈夫だろう
うん、大丈夫

そう自分に言い聞かせてドアに手を掛ける。

ガチャ・・・

あれなんで開いてんだ？ここには俺以外の人は来ない筈・・・
不審には思ったが好奇心の方が大きかった俺はドアを開く。

そこはいつもの変わらない屋上の風景だった。

一人の少女が立っている事を除いては・・・

少女が口を開く

「来てくれたんだね！」

・・・

「はあ・・・？」

いきなり何を言ってるんだこの少女は。

あれか？電波系ってやつなのか？

「失礼だなー私は電波系なんかじゃないよ！」

え・・・。さっき俺心の中で喋ってたよ・・・？

「うん。さっきキミはちゃんと心の中で喋ってたよ」

ちょっと待て・・・何者だよこの子。

「ん？どうしたの？」

少女はあまりの驚きで声が出ない俺に向かって訊ねてきた。
これは何を聞くべきなんだろうか

聞きたいことが多すぎて頭が考えに追いつかない
ショート寸前の頭を何とか動かしやっとなってきた言葉が

「あんた名前は？」

ちよっ！我ながらマイペースすぎる・・・

なんでこの状況でこんな質問が出てくるんだよ！
もつと他に聞くことあっただろうー！！

と自分で自分のマイペースさを呪っている

「私？私の名前はエリアルだよ！」

急な質問にも特に驚くことなく答えた少女。

「エリアルってことは少なくとも日本人じゃないのか？あんた」

聞きなれない名前に違和感を感じて質問を試みる。

「そうだね。ちなみに私はこの世界の人間じゃないよ。」

「マジかよ・・・」

「うん。マジだよー！」

少女の突然の告白に驚きつつも今日の夕飯何かな？なんてことを考
える俺だった

「おーい。生きてるー?」

「・・・はっ!今日の夕飯はハンバーグかカレーか
考えていたらついボーっとしてしまった」

「うん、とりあえずその事についてはスルーさせて貰うね・・・」

俺にとっては結構大事な事だったんだがな。

そういえば改めてみるとこの子おもいつきり日本人離れな容姿して
んなー

青髪長髪、それに目の色だって青いしな。

「・・・?私の顔何かついてる?」

そういつて自分のペタペタと触っている少女

そんな少女を見ていると何故だか笑いがこみあげてきて、俺は思わ
ず笑っていた

「はははっ!ははっ!」

そんな俺を初めて驚いたような顔で見ていた少女。

すると彼女も

「ふふっ。キミ面白いね!」

なんて事を言ってきた。

俺が面白い?ふと疑問に思ったが

そんなことは自分の笑い声ですぐにかき消されていた

そして、しばらくの間俺とエリアルと名乗る少女は空に向かって笑っていた

+++++

笑い疲れた俺達は本題に戻ることにする。

「で、一体どういうことなんだ？」

「何が？」

「いや！何が？じゃなくて、何でお前がいきなり俺の前に現れたんだよ？」

今まで疑問に思っていたことを聞いてみる。

すると彼女は

「私のことはエリアルでいいよ、それとキミの前に現れたワケかー強いて言うなら・・・」

「言うなら・・・？」

「キミは選ばれたんだよ！」

「・・・はい？」

俺が選ばれた？一体何に？

「えっとねー私の世界ではね他の世界の未来
つまりこれから起こる出来事がわかるの」

ふんふん・・

「それでキミの世界の未来を見たんだけど」

「どうだったんだ？」

まあ普通に考えて悪い事が起こったに決まってるよな
良い事だったらエリアルがこの世界に来るわけないし

「この世界に異世界からの侵略者が現れて襲われる未来が見えたの」

何その小学生が考えそうな設定・・・

「むー。もしかして信じてないのー？ホントなんだよー！」

頬を膨らませて怒るエリアル。

「悪い。でも俺の世界の今の状態から考えてそんな事は有り得ない
んだが」

「それが有り得るから私が来たんだよ。」

でもどこがどうなったらこの世界がエアリアルの言った通りになるん
だ？

「まあ詳しいことはまた後で、とりあえず今はキミの選ばれたワケ

を話すね」

「大体のことはさっき話したけど、
キミはその異世界からの侵略者と戦うための人物として選ばれた
の」

「ちょっと待て。今なんて言った？」

「え？異世界の侵略者と戦うため」

俺が戦う？どうやって？

人より少しマイペースなだけのそれ以外は普通の人間の俺が戦うの
か？

「やっぱり驚いた・・・よね？」

俺を心配したのか気遣ってくれるエリアル。

「多少は驚いたが今日は驚きの連続だからもう慣れた。」

「あ・・・そうなんだ。」

「でも戦うにしてもどうやって戦うんだ？俺、普通の人間だぞ？」

疑問を聞いてみると

「あ、それは大丈夫。キミは力の素質があるから選ばれたんだよ」

素質？

「それって魔法みたいなもんなのか？」

「うーん・まあそれと似たような物だと思ってくれていいよ」

「素質があるってことは俺も力が使えるってことだよな」

「うん。そういうことになるね。」

「どんな力なんだ？」

「うーん。力は人によって様々だからね。キミの力は・・・」

「えーと、なんだっけ？」

おいおいそりゃないぞ！

「ウソウソ。冗談だよ キミの力はね・・・」

こいつこんな茶目つ気あつたのかよ・・・などと

エリアルの新たな一面を知りつつ俺はエリアルの言葉に耳を傾けた。

「専用武器を持っている時に限り水と風を操る力かな？」

え？何か微妙じゃないか？

「それって強いのか？」

素朴な疑問を投げかける。

「うーん。強いことは強いんだけど、専用武器が必要っていうのが

ね・・・」

やっぱりそこか・・・

「で、その専用武器とやらは何処にあるんだ？」

「わかんない」

えっ！？まさかの一言すぎるんだが。

「えっと・・・実は私がここに来たワケはもう一つあってね・・・」

嫌な予感しかしないんだが一応聞いてみるか・・・

「どんな理由だ？」

「キミと一緒にその専用武器を探す為・・・なの」

嫌な予感的中したー！！

「普通なら自然に力が目覚めるんだけどね

キミは特殊で、ある条件下でしか力が目覚めないから」

「じゃあ専用武器が無い間は俺は只の人間ってことか？」

エリアルは少し困った感じで

「全く使えない訳ではないんだけど・・・」

「どうしたんだ？」

何か言いにくいことなのか？

「私が傍にいる時なら少しだけでも水の力が使えるはずだよ
私もキミと同じ水の力だから」

少し？

「少しって？」

そう聞くとエリアルはますます困った感じで

「えーと・・・手のひらサイズの水球を作って

相手に投げつけることが出来るぐらい・・・？」

なんで最後疑問系なんだよ？

「それってさ、今敵に襲われたらものすごくマズイんじゃないのか・

」

「だ！大丈夫だよっ！私がいっかり見つかるまでサポートするから
」！」

なんか段々心配になってきたぞ・・・

「あ。そういえば風の力は使えないのか？」

いくら少しとはいえ力は多く使えた方が良いからな！

しかしそんな俺のわずかな希望を打ち砕くかのようにエリアルが喋
った。

「ごめんね・・・私、水の力しか持ってないから風の力は使えないの・・・
ホントにごめんね！」

「いやエアリアルが謝ることはないんじゃないか。」

でも・・・前途多難だな・・・

「でも、もしかしたら風の力も使えるようになるかもしれないよ。」

おお、俺にも希望が・・・

「風の力を使ってる人に出会えたら・・・だけどね。」

無理な気しかない

「まあそれまでは私と一緒に頑張ろう！！！」

確かに今そんなことを気にしても仕方無いな。うん。

「そうだな！まあ明日からのんびりやっていくか！」

「そうそう！その意気だよ！」

気がつけば辺りはもう薄暗くなっていた。結構話し込んでたんだな
俺達。

「さて、俺はそろそろ家に帰るけどエアリアルはどうするんだ？」

っていつかこっちの世界でどうやって暮らすつもりなんだ？

「んー？私は大丈夫だよ。ちょっとしたアテがあるからね。」

「へー。そうなのか。」

もしかしたらこっちに仲間もいるのかもしれないな。

「そっか。なら大丈夫だな。」

「大丈夫って？」

エリアルが俺を見上げながら聞いてきた。

「ん？いやもしかしたら泊まる所ないんじゃないかなって思ってたさ。」

「そんな心配してくれたんだ・・・。」

「それが普通じゃないのか？」

「キミは優しいね・・・ありがとう・・・。」

「え？何か言ったか？」

「ううんっ！何でもないよっ！じゃあね！」

そういつてエリアルは足早に夜の闇に消えていった。

さてエリアルも帰ったことだし俺も帰るか

+++++

家に帰りつくと母さんが夕飯を用意して待っていてくれた。

「今日は珍しく遅かったわねー。」

「まあ色々あってね。」

「ふーん。そうなの。」

母さんはあまり気にしてない様子だった。

「さ、早く食べましょ。せっかくのご飯が冷めちゃう」

「そうだな。いただきます。」

「いただきます。」

ちなみに夕飯はハンバーグだった。

夕飯を食べ終わったあと風呂に入って自分の部屋に戻った俺は
今日一日の出来事を思い返していた

今日はいろんな事があったな

まず始めにエリアルと出会ったこと

俺達の世界が異世界人に狙われていること

俺に力の素質があってその力を使って異世界人と戦わなければいけ

ないこと

でも俺の力は専用武器がなければ目覚めず

エアリアルをサポート無しではまともに戦えないこと

その専用武器はどこにあるかわからず

エアリアルと共にこれから探さなければならぬこと

風の力を使うにはその力を持った人と出会わなければいけないこと

エアリアルに意外にも茶目っ気があったこと

本当に色々あったなー。最後のはいらぬない気もするが

そんなことを考えながら俺はいつの間にか深い眠りに着いていた

第3話 思いがけない来訪者（前書き）

3話です

第3話 思いがけない来訪者

チュンチュン・・・

今日も鳥の鳴き声で目が覚める

あまりにも普通の日常すぎて昨日のことが嘘のようには思える

「でも嘘じゃないんだよなー」

そう呟き朝食を食べに一階へと降りた

「早く食べちゃいなさい」

下に降りるなり母さんから急かされる
適当に返事をして、朝食に手をつけた

朝食を食べ終わり歯を磨き制服に着替えて家を出る

そういえば今日から武器探しするんだよなー
ってかエリアル何処にいるんだろうか？

そんな事を考えながら歩いていると

「聖ー、おはよーさん！」

「聖くん・・・おはよう・・・」

翔と咲だ

「あー2人ともおはよう」

「なんかこの3人が揃うのって珍しいな！」

翔の言葉に

「た、確かにそうですね・・いつも私は先に学校に行ってるので・・」

ちなみに咲は俺以外の男子には基本的に敬語だ

なんでも本人によると

「聖くん以外の男の人は獣にしか見えないの」

だそうだ。全くもって意味がわからん。

でもやっぱり平穩っていいなといつももの日常を噛みしめながら学校に向かった

学校につき、靴を履きかえてクラスに向かおうとしていると翔が、

「おい、なんか向こうの方騒がしくないか？なんかあったのかねー」

翔の言う方を見てみると確かに人だかりができている。

すると気になったのか翔が

「なあなあ！ちょっと見に行かねえか？」

と言ってきた。俺はああいう人だかりが苦手なんだよな！。

確か咲もこういうのは苦手だった筈

そう思ってた咲の方をみると案の定嫌そうな顔をしていた

だから俺は

「悪い。俺と咲はパス」

「すみません・・・私もちよつとああいうのは苦手なので・・・」

俺達2人に断られたのが余程ショックだったのか

「くそおおっー！！この裏切り者ー！」

と泣きながら人だかりに消えていった。

「何か悪い事した気分・・・」

隣を見ると何故か落ち込んでいる咲

「いや、全くお前が気にすることないんだぞ」

そういつて落ち込んでいる咲に声を掛ける

「そうなの・・・？」

涙目でこっちを見てくる咲

どんだけ気にしてたんだよ・・・

「あいつはリアクションが大袈裟すぎるんだよ。ほら、もういいから教室行くぞ」

「え？う、うんっ。待って聖くん！」

そっついながら後ろからついてくる咲と一緒にクラスに向かった

+++++

教室にくと咲と別れいつものように机に突っ伏していると

廊下の方から俺の名前が聞こえてきたが多分幻聴だろう。うん、幻聴だ

そう決め付けて俺はまた机に突っ伏すことにする

「おおおーい！！ひっじりいー！！！！ビッグニュースだぞー！！！！」

さっきよりも幻聴が鮮明に聞こえてくる。そうか・・・

「俺ももう終わりなのか・・・」

人生の終わりを覚悟した俺に声が聞こえる

「おい聖！何寝てんだよ！ビッグニュースなんだって！！」

ん？この声どっかで聞き覚えがあるような・・・

「もしかして翔か？」

「いや、もしかしなくても翔だぞ。お前どうしたんだよ」

「んーすまん、ボーっとしてた」

何せ唯一の友人の声を幻聴と勘違いするくらいだからな
相当だったんだろうと、自分自身に訳の分からないフォローをして
翔の方に向き直る

「で、何の用だ？」

「そうだ！そのことでお前に用があつたんだよ！」

いやどの事だよ・・・

そんな俺の心のツツコミを華麗にスルーして話を続ける翔

「今日な！俺らのクラスに転校生が来るんだってさ！！

しかも女子でハーフっぽい可愛い娘らしいぜ！

なあなあその子小さいかな？幼いかな？ロリだろうな」

おい、最後勝手に決め付けてるぞ。そんなことより、少し気になる
な・・・

いや気になるというより嫌な予感がすると言ったほうがいいのか
マンガとかでもよくある前の日出会った子が次の日転校してきまし
た！

ってパターンな気がしてならない

エリアルならやりかねない。根拠は無いけどそんな気がする
むしろ根拠が無いのが根拠と言ってもかまわないくらいだ

と、頭をフル回転させながら考えていると

「おいどうしたんだ？まさか遂にお前も女子に興味持ったのか？」

なんてからかってくる翔、しかし今はエリアルルのことでも忙しい俺は

「んん？まあそんな感じだ。」

と適当にあしらってまた考え始める

その時に後ろで咲が

「ウソ・・・女の子に興味を持つなんて・・・そんな・・・」

こんな感じのセリフを残して教室から出て行ってしまった

どうしたんだろうか？だがそんなことを気にしている暇は無い

もしも転校生がエリアルルだった場合どうしようか。そのことについてしばらく考えていると

「もうチャイム鳴ってるぞ。ほら早く席につけ」

先生が来た。隣を見てみると咲が帰ってきていた

いつの間に帰ってきたんだろうか？

しかも何か目の周り赤く腫れてるし・・・大丈夫なのかあいつ？

そんな俺に気づいたのか、咲はこっちに口パクで大丈夫だよ。と言ってきた

そっか大丈夫ならよかった、と安心した俺を再び心配させるかのよう

「皆もう知っているかもしれないが、今日は転校生が来ている
今からその転校生を紹介したいと思う」

先生からの恐怖の報せがやってきた

「それじゃあ入ってきてくれ」

ガラガラッ・・・

エリアルでないことを必死に祈る俺、盛り上がるクラスメイトと先生
先生あんたもかよ

そこに現れたのは・・・

「初めまして、ひいらぎかれん 柊火憐と申します」

あれ？エリアルじゃ・・・ない・・・？でもおかしいぞ？
確か翔は転校生は日本人離れの可愛さと言っていたが
この柊火憐とかいう子はどっからどう見ても日本人だ
ということとは翔が間違えたかその情報そのものが間違っていたとい
うことになるのか

まあ何はともあれエリアルじゃなかったなら安心だ

その後俺はスッキリした気持ちで一時間目の授業を受けた

そして授業も終わり休み時間・・・

次の授業の準備をしていると聞き覚えのある声が聞こえてくる
あれ？この声はまさか・・・そんなわけ無いよな・・・

うんうんあいつがここにいる訳・・・

「聖ーっ」

聞き覚えのあったこえの主はやはりエリアルだった

「1つ聞いていいか？」

頭を抱えながらエリアルに話しかける

「うんいいよー！」

「何でお前ここにいるんだよ！」

俺は今世紀最大の謎とばかりに、大声をだす

しかしそんな俺の態度などスルーしてエリアルはあっさりと俺の疑問に答えた

「何でって転校してきたからだよ？私言っでなかったけ？」

いえ・・・全く存じていませんでした

「まあいいやちょっとこっち来て」

エリアルが俺の手を掴んで教室から出ようとする

するとそれを見ていた家のクラスの男子どもが一斉にこっちに憎しみ満載の視線を向けてくる

まあだからといって気にするわけではないが

こうしてあっさりと教室から抜けてきた俺とエリアル
人気の少ない所まできたところで俺は手を離す

「聞きたいことが山積みなんだが」

「私も正直どこから話したらいいか分かんないんだよね
まあ話せる所から話していくね」

「わかった」

「えと……。まず私が転校してきたワケは
まあ単純にキミのサポートをしやすくするためだね」

「っていうかこいつ高校生だったのかよ・
どうみても中学生にしか見えないんだが・」

「キミ今ものすごい失礼なこと考えなかった？」

「え？い、いや。何も考えてないけど」

「ふーん。ホントかな・・・？」

「ほらほらそんなことよりもっと大事なことがあるだろ」

「まあ今回は許しといてあげる」

ふう危ない危ないそういえばエリアルは人の心が読めることをすっかり忘れていた

「で、話先に進めてもいい？」

「ああ構わないぞ」

「それとキミのクラス転校生来たでしょ？」

「ああ、柊火憐だったか。あの子がどうかしたのか？」

「あの子敵かもしれない」

「でもあの子は至って普通の人っぽかったぞ。名前だって日本人の名前だし」

「名前は偽名使えばいいし、容姿は力を使って成りすましてるかもしれないよ

現に名前なら私だって偽名使ってるし」

「あ、そうなのか？ちなみになんて名前なんだ？」

「水野みずのえり絵里だけど？」

水野・・絵里・・？こいつが？

「・・・ないな」

「もう面倒くさいからスルーさせてもらうね・・・」

なんかエリアルの奴スルースキル高くないか？

「で、話は戻るけどあの転校生には気をつけてね」

「ああ了解」

「で、次に武器のことについてだけど
どつちらこの町のどこかにあるみたいだね早速今日探してみよう
よ」

「でもどこ探すんだ？」

「とりあえず街中グルグルすればいいんじゃない？私の街中見学も
兼ねて」

「じゃあとりあえず今日はそうしてみるか」

「うん！」

「じゃあそろそろ教室戻るか。授業サボってるし、エリアルに至っ
ては転校初日だろ」

「確かにちよつとやばいかもね・・・」

「まあとりあえず急いで戻るぞ」

「うん」

そういつて教室に戻ろうとした俺達の前に人影が現れた

「あの一。聖さん？」

「！？終火憐！？何でここに？」

「くるかもしれないよ気をつけて！」

と警戒はしたものの一向に襲ってくる気配はない。それどころか

「えっと？何のことでしょうか？」

などと言いだす始末。

「え？違うの？じゃあ何でこんな所に・・・」

「柘さん！何処ですか？」

ん？この声はもしかして・・・

「おおーい！咲ー！」

「あ！聖くん何でこんな所にいるんですか！というより柘さん知りませんか？」

聖くん達を探すついでに学校案内してたら急に居なくなっちゃって！」

なるほど・・・そういうことか

「安心しろ。柘ならここにいるぞー」

「本当ですか！よかったー」

「ほら柘、咲が呼んでるぞ」

「そうですね、森宮さんには心配をかけたみたいですね
早く戻らなくては、聖さん達も早く戻ってきてくださいね」

そういつて柊は戻っていった。

「ほら早く俺たちも戻ろう」

「うん、そうだね」

そういつて俺たちも教室へと戻っていった

エリアルには言っていないけど、最後柊とすれ違ったときあいつ笑ってた気がするんだよね

気のせいであってほしいけど・・・

教室に戻ると案の定先生に絞られた。

いまごろエリアルも同じ目に遭っているだろう

出ていった理由を聞かれたのでエリアルへの校舎案内と答えて取りあえずその場はなんとか逃れられた

自分の席に戻る途中翔が「早くも転校生とラブラブかあ？」「なんてことを言ってきたが

「黙れ犯罪者予備群」と返すと

「俺は違う！俺はちがうんだあー！！」と後ろから絶叫が聞こえてきたが

そのままにしておくことにする

そして面倒くさい授業も終わり昼休み・

現在俺は俺、翔、咲、エリアル、柊という構図で昼飯を食べているで、なぜこの中に柊とエリアルがいるかと言つと

時は戻つて昼休み開始時

昼休みに入るなり廊下の方から俺の名前を呼ぶ声が聞こえてくる俺の名前は廊下で呼ぶのが主流なのか？

まあ当然その声の主はエリアルなんだが、教室に入ってくるなり

「お昼一緒に食べよ」

なんて言ってくる。特に予定の無かつた俺はとりあえず了承したすると隣にいた咲が

「わ、私も一緒に食べていいかな？ 聖くん・・・」

と訊ねてくる。咲だつたら断る理由がないので了承した

で厄介なのがコイツだ・・・

「聖いー、もちろん俺もいいよな？」

「駄目にきまつてるだろ」

「なあー頼むつて！」

「どうせお前の事だからエリア・・・水野の事が気になるんだろ」

危なかった・・・もう少しでエリアルのことバラすところだった・・・

「わかってるならなおさら頼むよ！」

あーもう面倒だなー

「わかったよ、ただしお前は水野から離れて食べるよ」

「ホントか！？サンキュー聖！」

こいつはなんでこんなに喜んでるんだよ・・・

「話は終わったー？」

エリアルが後ろからひよっこりと顔を出す

「ああ。終わった。それじゃあ行くか」

そういつて席から立ち上がるうとすると、

「あの・・・よかったら柊さんも誘いませんか？」

と咲が言う

やはり転校生だからだろうか放つてはおけなかったようだ

翔とエリアルは快く了承したらしい

だから俺も

「そうだな。いいんじゃないか。」

そう言った

そして今に至るといっわけだが

女子ってのは凄いな、もう打ち解けてるよ

相変わらずエリアルは柊に対して警戒してるけどな。

そんな光景を眺めていると隣で翔が

「俺もあの中に入りたいな・・・」

と興奮気味に呟っていた

そんな翔を軽蔑しながら俺は一人昼飯のパンを頬張った

第4話 決戦前夜（前書き）

4話です

第4話 決戦前夜

学校も終わり時は放課後

朝に話した通り今はエリアルに町を紹介しつつ武器探しのために散策中だ。

「なあ、その武器ってなんか特徴とか無いのか？」

そう、今の状態じゃ例え武器を見つけたとしても気づけないかもしれない
もしかしたらそこら辺にありふれた物が武器の可能性だってある

「あるよっ!」

あったのかよ。ならもっと早く言おうぜ・・・

「どんな特徴なんだ？」

「えとね・・・確か球体だったはず・・・」

え？球体？

「そんな物が武器なのか？」

さすがに俺も球体で戦うのは無理があるぞ・・・

「最初の状態ではそうなの。聖が力に目覚めた時にキミが望んだ形状になるんだよ。」

へー。そりゃ凄いな

「じゃあ例えば俺が剣を望めば剣になるのか？」

「うん、そういうこと。後ね、言い忘れてたんだけど・・・」

「うん？どうしたんだ？」

「実は武器は2つあるんだ。水の武器と風の武器の2つ」

・・・なんだって？

「で、この町で反応があつたのは水の武器の方ね」

「じゃあ今回探してる武器が見つかったとしても・・・」

エリアルから聞きたくない言葉が放たれる

「うん、もう1つ探さなきゃいけないね。」

なんかもう嫌になってきたぞ・・・

「お前武器の気配感じたりできないのか？」

気になっていたことを聞いてみる。

「うーん。私も今は力を完全に使えるわけじゃないからね」

「あれ、そうだったのか？」

てつきり常に力を使えるものだと思っていたんだが

「使おうと思えば使えないこともないんだけど、
街中で武器を呼び出さなきゃいけないからね」

確かに街中で武器なんて出せるわけないな、うん

ってか

「武器って呼び出せるもんなのか？」

「うん。普段は別の空間にあるんだけどね、望めば現れるよ」

「そっいえばエアリアルは武器って何なんだ？」

これでハンマーとか斧とかだったら引くぞ・・・

「私？私はただの杖だよー」

「なんか普通だな」

「別に普通でいいもん！私は気に入ってるんだから！」

そっついながら怒るエアリアルはどうみても子どもだった
ってかなんか話が別の方向に逸れてるな。

「でだ。武器のありそうな場所の見当が全くつかないんだが」

「私もだよ。どうする？今日はもうやめにする？」

自分で探すって言い出してこの結果かよ・

でも確かに今の状態じゃいくら探しても見つかりそうにないしな
また日を改めるか・

その時・・・

「あら、聖さん、水野さん何か探し物ですか？」

柊だった…

「っ！柊火憐！」

相変わらずエリアルは警戒心むき出しだ

そんなエリアルを見て柊が、

「あらあらそんなに怒っていると見つかるはずの物も見つからなくなりますよ。ふふっ」

どういう事だ？まさかこいつ？

「あー思い出した・・・なんで気づけなかったのかな」

えっ？ちよつと急展開すぎてついていけないんだが・・・

「えーとエリアル？これはつまりどういことなんだ？」

とりあえずこの状況を聞いてみる。

「間違いなく言えることが1つあるよ。あの女は敵」

そう言っつてエリアルは柊の方を指さした

「そんな勝手に決めつけられると私、傷ついちゃうわっエリアルちゃん」

と笑いながらそんなことを言っつてくる柊

エアリアルの名前知っつてるっつてことはマジで敵っぽいな・

エリアルも向こうのこと知っつてるみたいだったし

「でもね、今日はあなた達と戦つたために来たわけじゃないの」

「じゃあ何の目的!?!」

なんかエリアル相当気が立っつてるな

「今日はただの宣戦布告にきただけよ」

「明日の夜、そうね夜中ぐらいがいいかしら。学校にいらっしやい。私と勝負して勝つことが出来たらいいこと教えてあげるわ。それじゃあね」

そういっつて柊は帰っつていった

柊が帰つた後俺達はしばらく声が出なかつた

「ねえ聖……」

エリアルが話しかけてくる

「なんだ……」

「今日これから時間ある……？」

同じ事を聞こうと思っていた俺は、もちろん

「ああ」

そう答えた

「じゃあビシビシいくから覚悟してね！」

こうして終戦に向け特訓が始まった

最初に俺達は人気の無いところに移動した
その方がいろいろと都合がいいからな

「それじゃまずはアイツの事に教えておかないとね」

そういうとエリアルは柊のことについて教えてくれた

あいつの本名はフレムっていつて

元はエリアルと同じ世界の人間だったが、ある事が原因で追放されたらしい

で、昔からエリアルとフレムは仲が悪かったっぽい

まあ犬猿の仲ってやつだ
だからエアリアルはフレムの前ではあんなに怒ってたようだ

んで、次はフレムの力と戦闘スタイルなんだがこれがまた厄介そう
だ???

フレムの力は獄炎っていつて炎の力の1つらしい
だったら水の力を持つエアリアルならって思ったんだが

「私の力は水流っていう力で水の力の中ではそんなに強い力じゃないの・・・」

とのことだ

それに対してフレムの獄炎は炎の力の中でも結構上位の力で
エアリアルの水流じゃ勝負にならないとかなんとか

じゃあどうするんだよって話なんだが
どうやらフレムは上手く獄炎を扱えないからすぐに体力が無くなる
だから今回の戦いはその隙を狙って戦うらしい

以上大まかな説明終わり

で、問題の俺はどうするかというとエアリアルが

「後ろで私の援護してて。前に出るのは無謀だから」

無謀ときたか・・・そこまでの相手なのかよフレムって・・・

特訓はまず今の俺にどれだけの力があるか確かめることから始まった

「じゃあまず手のひらに丸い球をイメージして」

丸い球????丸い球????こうか?

ポワンツという音と共に青い水球が現れた

「うん、基本はできるみたいだね。じゃあ次はもう片方の手にも水球を作ってみて」

俺は言われるままに水球をイメージした

水球が姿を現し始める・・・だが

パンツ！と水球ははじけ飛んでしまった

おかげで俺はびしょ濡れだ

エリアルは最初からこうなることが分かっていたかのように1人避難していた

しかもこつちを見て笑っている、なんて夕子の悪いやつだ

「くくつ・・・大丈夫・・・?ぷふっ!」

まだ笑っていやがる・・・

「ごめんごめん、あまりにも面白かったからつい・・・

両手に水球を作るには相当な集中力が必要だよ

1つの水球を作ることは簡単だよねでも、2つになると出来なくなるどうして分かる?」

俺はすぐに頭に思いついた答えを言ってみた。

「2つのときは片方のイメージを保ったままもう1つを作らないといけないからか？」

「正解。よく出来ました！だから今から2つの水球を作れるようになるために

集中力を高める特訓をするよ」

「それはわかったがどんな特訓なんだ？」

「やっぱり集中力を高めるといったら瞑想でしょ！」

瞑想かよ・・・もっとハードな特訓だと思っていたんだがな・・・

「はい！瞑想開始！」

「いきなりかよっ！」

「私語は慎む！」

いきなり始まった瞑想に驚きながらも、俺は意識を集中させた

そして集中力が高まってきたところに

意識を手のひらに集中させながら1つ目の水球を作り出す

ここまでは簡単だ、問題はここから・・・

俺は空いているほうの手に意識を集中させながらも、

もう1つの手に意識を集中させる。そして水球が現れ始めたとき、意識を最大限に集中させた

「今だっ！」

俺は目を静かに開く。俺の手には2つの水球がちゃんと現れていた

「やったね聖！出来たよ！」

エリアルがまるで自分の事のように喜んでいるが、正直俺はまだ実感が湧かない

「それじゃ次の特訓いつてみよう」

結局喜ぶ暇も無いまま次の特訓にとりかかる

「次の特訓はこれ！コントロール上昇練習
やっぱり当たらないと意味がないからね」

そういつてエリアルはどこからともなく杖を呼び出す
そして杖を一振りするとそこら中に水のカーテンが現れた
そして最後に

「今から10分以内にあの水のカーテン全部消してきてね。
ちなみに水球じゃないと消えない上に動くよあれ」

いや普通に考えて無理なんだが・・・
しかしそんなことを考えている間にも

「いい〜ち〜、にい〜、さあ〜ん・・・」

って数えてるし！

「ほらほら急がないと、時間無くなっちゃっよー。」

こっちだつて必死でやってるんだがいかんせん
殆ど当たらない

がむしゃらに投げてみるがやっぱり当たらない

時間が経つにつれ焦りが強くなってくる

投げても当たらないんじゃないか？

そんなことだけが頭の中を支配する

「残り1分だよー」

その通告を聞いた途端、頭の中で何かがはじけるような音がした
もうなるようになれだ！そう思った俺は

両手の水球を合わせる。すると大きな1つの水球になった

「いつけえー！！」

もう何も考えずにその大水球をカーテンに向かって投げる

そして命中した瞬間弾け飛んだかと思つたら

小さな水球が四方八方に飛び回る

さすがにこの状況はエリアルも予想していなかったみたいだ
叫びながら水球から必死で逃げ回っている

そして水球が無くなるころには水のカーテンも無くなっていた
おそらくさっきの飛び回る水球で全て消えてしまったんだろう
エリアルの方を見てみると水球の1つが命中したのか
びしょ濡れの姿でむっすりした顔のエリアルが立っていた

「これは合格つてことでもいいのか？」

と聞いてみると

「別にいいんじゃないの。手段はどうぞであれ一応カーテンは全て消したんだし

さあ、もう今日はこれくらいにして帰ろっか」

と返ってきた。もう終わりなのか？ 案外早かったな

「じゃあ私帰るから」

そういつて帰ろうとするエリアル

夜道に女の子1人は危ないだろうと思いい声をかける

「送っていいっつうか？」

「べっ・・・別にいい！1人で大丈夫だもん！」

何故か頑なに拒否されてしまった。

そうこうしているうちにエリアルの姿が見えなくなる

「・・・俺も帰るか」

明日の決戦に向けて俺は家路についた

決戦

「あら遅かったじゃないの。エリアルちゃん」

「それだけ余裕があるってことよ」

「言ってくれるじゃない。さあいつでもかかってきなさい！」

「じゃあ、遠慮無くっ!!」

あのー二人そろって俺のこと忘れてんじゃないですかね…
完全に俺蚊帳の外なんだけど。

「聖っ、邪魔！ちよつとどいて！」

えっ何？遂に俺邪魔者扱い？

もう帰ろっかな…何かすごく空しくなってきた。

一人黄昏る俺を尻目に二人はどんどんヒートアップしていく。

「ほらほらっ！これでもくらいなさい！<炎獄>」

「きゃああああ!!」

エリアルがやられている。でももうやる気が一切起こらない。

「がんばれーエリアル」

今出来る最大限の応援をする。

「聖……いい加減にしなさいー！っ！……！」

決戦 ー決着ー

「へっ………?」

<水流>

エリアルが大きく振り上げた杖から逆巻く水流が俺に襲いかかる。

「うおおおおお!!! やめろ! エリアル! 死ぬ、死ぬから!」

そう叫びながら必死に襲い来る水流を避ける。

てか、なんだこの水! 追尾性能高すぎる!

なんで女の子に追いかけられるより先に水と追いかっこしなきゃいけないんだよ!

「てかなんで俺が攻撃されなきゃいけないんだよ! お前の相手は火憐だろ!」

「あつ、そっか。聖があまりにもむかつく態度取るからつい………」

何その私怨マックスな理由は……

もう俺の事はいいからさっさと目的の相手と戦ってくれ……俺の安全のために。

「あんだ達ねえ! 今の相手は私なの! 分かってるの!?!」

遂に我慢の限界か、火憐がぷつぷり切れてしまった。

いや、俺は最初からちゃんと分かってたぞ……?それをエアリアルが……

「何、聖？ 私がどうしたって？」

「はっ！？ いやいや何も無い！！」

「次は無いからね」

そういつてニッコリと微笑むエリアル。

顔は可愛いけど心は怖い……。おっと！ これ以上変な事考えたら消される。本気で。

「い、い……」

「ん？」

みれば何故か火憐が体をわなわなと震わせている。

どうした？ トイレか？ とは口が裂けても言えない。

もし、言ったら聖君の丸焼き（レア）が出来あがるだろうな。

「い・い・加・減・に・し・な・さ・い・よ！！」

文にして表したら一文字一文字に区切りがありそうなセリフを叫ぶ火憐。

つつか、そこまで怒るような事はないだろ。たかが無視されたくらいで。

「もう切れたわ……あんだ達を望み通り丸焼きにしてあげる」

「いや、誰も頼んでねえけど」

「うるさい！ 黙ってくらいなさい！」

<炎獄>

もう駄目だこいつ……早くなんとかしないと。

人の話をまるで聞いちゃいねえよ。

しかもこのままだとさっき俺が考えたみたいに聖君の丸焼き（レア）が本当に出来あがってしまう。
どうする！？

「エリアル！」

大声で叫んで炎獄を止めようとしているエリアルを呼ぶ。

「何！ 聖、どうしたの？」

「俺にも何か仕事をくれ！」

心からの雄叫び。明らかにここにきてからの俺は邪魔者でしかない。いい加減エリアルになりたい。今はほんの少しの力しかないけど何か出来る筈だ。
そう思っただけだ。

「じゃあ、私の準備が完了するまで困よろしく！」

「任せろ！ ……って困？」

<水流>

「ぶはあっ!!」

いきなり後ろから水に吹き飛ばされる。

行先はもちろん炎獄だ。……ああ、なるほどそういうことね。で、俺にこいつをどうしろと？ たしかエアリアルの話によるとこの炎獄ってのは炎系統のなかでも相当上位に位置する能力だったはずだが？

すると、俺の心を読み取ったエアリアルがまたしても悪魔の類笑みでこっちに話しかけてくる。

「ごめん、自分で何とかして……ね!」

くそっ、「……ね!」の部分がちょっと可愛いか思ってしまった。死にたい。

てか無理です。だが、もう炎は目の前まで迫ってきている。

くそ、こうなったらヤケクソだ! 空中で両手に水球を作り出す。更にそれを重ね合わせて大水球を作る。そして、開いているもう片方の手で水球を作り、大水球に合わせる。それを何度も繰り返し、特大の水球が出来あがった。名付けて、アクアバズーカだ。

「……………ダサっ」

ぼつりとエアリアルが呟きを漏らす。何だよ今の! 某呟きサイトでぼろっとなきました!

みたいな感じで言うのをやめてくれ。悲しくなる。

「さて、そろそろこれをブツ放すか……」

右手を火柱の方向に向け思い切り振りかぶる。

「ひじり！ いっきまーす！」

某ロボットアニメの名言を叫びながら腕を思い切り振りぬく。火柱に水球がぶつかりとジュワと凄まじい量の水蒸気が現れる。ただ、いくら俺の全力とはいえ、火柱はほとんど消えてない。

「ふふっ、そんな水玉ごときに私の炎獄が敗れるわけないでしょ」
火憐が自慢げに鼻を鳴らしながら言う。まあ確かにそうだろうな。ただし……それが俺だけの力だった場合だけだな。

「エアリアル！ 今だ！」

地面に身体を叩きつけながらも思い切りエアリアルに向けて叫ぶ。これで終わらせてこい！

「了解！」

<水流> LEVEL UP

「え？ え？」

「どうした！？ エアリアル！ 何かあったか？」

「う、ううん……何でもないよ」

「よし、行つくよー。これが私の全力全開！」

< 激流 >

エリアルルの杖に今までとは比べ物にならない程の量の水が集まる。
エリアルルすごいな。ちよつと見直した。

「あ、あれは……激流！？ 何で水流のあんたが使えてるのよ！」
ん？ エリアルルの力がレベルアップでもしたのか？
火憐は相当怯えてる。どうやらかなり凄い力みたいだ。

「分かんない。私も勝手に能力変わったから驚いたよ。……それじやあもう終わらせるね」

杖を一振り。先端に溜まった水が一気に解き放たれまるで蛇のよう
にうねりながら火柱に突っ込む。

さしずめ「水蛇」といったところか。俺の水球なんかとはまったく
桁が違う。

そのまま火柱をいとも簡単に消し去り、今度は火憐に標的を変える。

「私が……あんたみたいな小娘に……負ける……の？」

「そういうこと。残念だったねフレム」

水蛇が火憐に突進すると人形のように軽く吹き飛ばされていく。
傍目に見たら死にそうな威力だけど、さすがに死んでないよな……？

「大丈夫、そこまではしてないよ。あいつには、これから死ぬほど
働いてもらうから」

……ん？ 何か今違和感を感じるワードが出てきたが無視だ。無視。ま、何にせよ。この勝負、俺たちの勝ちだ。

後始末は私に任せて聖はもう帰っていいよ

エリアルからそう告げられたので家に帰って来た。

で、さっきまでの戦いの事を思い出してただけど……俺いらなくね？

結局、最後に決めたのはエアリアルの水蛇だし、明らかに俺の水球無くて問題無かったと思うんだ。うん。

まあ、いいか。もう終わった事だし。

にしてもエリアル。今回は凄かったな。てつきり口だけかと思っただ。

あんなに力を使いこなせるなんてな、俺も早くあんなになりたいよ。でも、そのためには武器が必要……はあ、何処にあるんだよ……

「聖ー、パパから何か届いてるわよ」

母さんが、いきなりドアを開けて現れる。

「うわっ！ びっくりした……またか、そこら辺に置いて」

「りょーかい」

荷物を置くと母さんは何事も無かったかのように去っていく。

我が母親ながら、あの隠密スキルは見習いたいものだ。

それより、何だよ父さん。もしかしてまた変なモン送って来たのか……
家の父さんは海外への出張が多い人でこうしてよく現地で仕入れた変な物を俺に送りつけてくる。
おかげで、俺の部屋は世界の文化展でも開けそうなほど、いろんなものがある。

「ったく、今度はなんだ？」

段ボールの中々に頑丈な封を解いて中身を取り出す。

「これは……スイカ？」

いや明らかに違うのは分かるんだが、何となく言いたかった。箱から出て来たのは緑色の丸い球体。ただそれだけ。
ん？ よく見ると手紙らしきものが入っている。どれどれ……

聖、元気してるか？ パパだ。

今回の贈り物はな現地の占い師のおばあさんがな。

「持つてるだけで金運、恋愛運その他諸々上昇する水晶石」ってのを売ってくれたんだ！

少々高かったけど聖の為にパパ頑張ったぞ！ 褒めてくれ！ これで聖も女の子にモテモテだな！

じゃあこれからも頑張れ！ パパより

うおおーい！ 父さん！ それただの悪徳商法！ 日本でも普通によくあるよ！

何普通に騙されちゃってんの……たかがこんな丸い球一つに……
でも、俺の為っていうからなあ、捨てるに捨てられない。

もういいや。とりあえず今日は寝よう。疲れた。
俺はベッドに飛び乗ると、そのまま目を瞑る。
いつしか、しらない間に俺は眠りについていた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6231r/>

異世界少女とマイペース男

2011年12月1日23時55分発行